

〈新刊紹介〉

福田アジオ著 『日本の民俗学——「野」の学問の二〇〇年——』

(二〇〇九年十月一日、三〇六頁、三三〇〇円 吉川弘文館)

逸 本 茉莉子

本書の著者である福田アジオ氏は、一九四一年生まれ、東京教育大
学文学部で民俗学を学び、武蔵野大学、国立歴史民俗博物館、新潟大
学などを経て、現在は神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授

で、「人類文化研究のための非文学資料の体系化」二十一世紀COE
プログラムのリーダーでもあった。サブタイトルの「野」には、民俗

学がルーラルな対象とするとともに在野の人たちが担ったとい
う思いが込められている。著者は村落社会と民俗、歴史学と民俗学の

関係、空間と時間に関する民俗、柳田國男の民俗学など、一九八〇年
代以降に話題となる著作を生産するとともに、新たな対象を見出し、

民俗学辞典や大学の教科書、日本の民俗学者に関する編著などに関わ
り、九五年から九八年までは日本民俗学会の第二三期代表理事も務め

るなど、日本の民俗学界をリードしてきた研究者である。

本書は日本民俗学のルーツを江戸時代に求め、柳田國男の死までの
二〇〇年間の学問としての形成、発展、変化を広く展望した日本民俗

学史である。とりわけ近代日本民俗学の二〇〇年の前史にも重きを置
いていることは出色である。生起した事実を年代順に書き並べるだけ

でなく、それらが相互に関連しあい、社会的にも影響を与えていると

いうことを多くの著作や著者自身の学問遍歴をたどりながら九章にわ
たりほぼ時代順に記述している。

本書の主要目次は以下の通りである。目次の下の数字は本書でのペ
ージ数で、()内は本文の分量を目安とした百分率である。

はじめに	四 (一・三%)
I 近世文人の活動と民俗認識	三三 (一〇・七%)
II 人類学の成立と土俗	一一 (三・五%)
III 民俗学の萌芽	一一 (三・九%)
IV 民俗学の登場	四一 (一三・三%)
V 民俗学の確立	六八 (二二・二%)
VI 戦争と民俗学	一五 (四・九%)
VII 日本の敗戦と民俗学	三二 (一〇・四%)
VIII 日本民俗学会と民俗学研究所	六三 (二〇・五%)
IX アカデミック民俗学への行程	一八 (五・八%)
参考文献	五 (一・六%)
あとがき	四 (一・三%)

柳田國男が本書で登場するのはIVからであるが、その頁数の分量では七七・一%におよぶ。日本民俗学が柳田國男抜きには語れないことがわかる。以下、本書を章ごとに詳しく紹介していきたい。

Iでは近世において人々が民俗というものに関心を持ち始めた契機が述べられている。武士や町人が百姓を観察し珍しい生活などを発見し興味を持ち始めることを、民俗という事象に対する関心のルーツとする。さらに武士や町人が旅のあとに紀行文を記すようになったことも民俗への関心を高めたとする。貝原益軒の紀行文、橋南谿の『東西遊記』、古川小松軒の『東遊雜記』、『西遊雜記』、菅江真澄の東北遊覧記、鈴木牧之の『秋山記行』、名所図会などが紹介されている。近世後期には自分たちの生活世界にも関心を抱き、民俗事象を記述する隨筆や地誌が登場したことに注目する。その到達点として、近世末に行われた「諸国風俗問状」という一定の調査項目に基づいた全国的な調査をあげる。これは一八八九年に雑誌『風俗画報』に掲載されたが、当時は特別注目されることもなく、後に柳田國男によって再発見される経緯を記す。近世後期になると、妖怪・怪談・死後の世界の経験などへの関心が強まり、それらが盛んに記録されるようになる。このような不思議な話の仏教説話的意義が薄れ、実際に起こった不思議を記録しようという姿勢を、民俗学的記述として評価する。

IIでは欧米から輸入された人類学の明治以降の日本での展開を述べる。日本における人類学の黎明は輸入学問であったとして、お雇い外

国人教師のアメリカ人博物学者モースによる大森貝塚の発見、当時の日本の生活実態を詳細に記述したことに求める。一方、日本人による人類学は東京帝国大学にいた坪井正五郎が人類学会を立ち上げ、一八八六年に『人類学会報告』（のちの『人類学雑誌』）を創刊したことを契機とする。坪井は、「人種学 (Ethnology)」は諸人種そのものを調べ、土俗学 (Ethnography) は諸人種の風俗習慣の調べである」と述べ、著者は現在の学問分野に照らし、人種学に民族学、土俗学は民族誌学という訳語を与えている。

福田はこの土俗学こそが日本民俗学の第一段階であるとして、坪井のもとで助手をしていた鳥居龍蔵が発起人となった土俗会の創始（一八九三年）に注目する。土俗会は現実の生活事象に学問上の価値があることを広く知らせるとともに、地域差は時間差であるという一元的人類史、欧米進化主義がその背景にあった。しかし、鳥居の研究の軌跡自体にもみられるように、日清戦争後、土俗学は日本列島の地域における「人」を研究対象にするようになり、人類学に変質していく。一九〇〇年頃から『人類学雑誌』には台湾、朝鮮、旧満州、ミクロネシア、メラネシアに関する報告や論文が急増した。同時に、学術用語としての「民族」という用語が第一次世界大戦以後に普及したことに言及し、民族学が確立したと指摘している点は興味深い。

IIIでは民俗的な調査や雑誌が登場したことにより、民俗学が人々の間に定着していく過程を述べ、明治新政府による家族制度、相続、契約売買などについて全国規模で調査した一八七七年の『民事慣例類集』（増補版は一八八〇年の『全国民事慣例類集』）をとりあげる。全国へ調査員を派遣し地元の人から聞き取りを行い記録を作成している

方法論が、後の民俗調査の内容と共通していることをあげる。一八八九年には民俗図録である『風俗画報』が創刊された。その多くは近世の江戸の庶民の生活についての紹介と考証で、近代の日本の対外膨張のなかで日本人の自己認識を進め、地方ごとの生活の違いを示したことがこの雑誌の果たした役割とする。

民俗学の名称は一九一二年に石橋臥波が日本民俗学会を設立し、翌年『民俗』を発刊したことを嚆矢とする。この学会は一つの学問立場や方法で結集したものではなかったが、福田は民俗や民俗学という用語を定着させる上で貢献したという評価を与えている。

Ⅳでは柳田國男の登場と、柳田を中心としたサークルや人縁から日本民俗学が出来上がっていく過程を述べる。一九〇八年に柳田國男が椎葉村で行った調査と翌年の調査報告書の『後狩詞記』に注目する。初期の柳田の民俗学は、焼畑、狩猟を行う山の人々（≠非稲作民）の研究が中心であったという指摘は重要である。その後、柳田自身によって、民俗学は日本の人口の多数を占める水田稲作民の生活を研究対象とする学問となっていく。

柳田國男は同種の事象に興味を抱く人々の連携・協同を試み、郷土会を創立する。一九一三年には高木敏雄とともに『郷土研究』を創刊した。『郷土研究』の記者を批判する文章が掲載されることもあった。『郷土研究』には多くの論文が発表され、一つの自立した学問の存在を世間に知らしめた。この方法に批判的であった南方熊楠の批判の一文も紹介されている。一九一八年には郷土会が主催して神奈川県津久井郡内郷村でわが国最初の総合的村落調査が行われた。今で言えば学際的調査である。調査事項には後の民俗調査で取り上げられる問

題が多く含まれていた。内郷村の調査結果は一冊にまとめられることはなかった。しかしこの調査は民俗学が次の段階に移行する大きな契機になった。

この柳田とはやや距離を置いて、在野の研究者を支援していったのが財閥の御曹司である渋沢敬三である。自邸でのアチックミュージウムを開設し、ここから早川孝太郎や宮本常一が巣立っていった。

Ⅴでは、民俗学者以外の間にも民俗学が少しずつ広まり、柳田國男によって民俗学が体系化されていく一方で、柳田が注目しなかった事象に焦点を当てる人々も現れ、民俗学の幅が広がっていく様子が述べられている。一九二〇年代の日本経済は、戦後恐慌、関東大震災、金融恐慌、世界恐慌の影響で慢性的不況と叫ばれ、その影響は日本の農村にまでおよんだ。このような状況の中で、かつて農商務省官僚・農政学者として農村問題に取り組んでいた柳田國男は、一九三〇年代初頭には日本の農村・農業の実践的課題に民俗学の方法で答えを出す努力を行った。民俗学の確立と社会貢献が同時になされ、その過程で研究の方法も整備体系化され、民俗学の全体像が示されることになったと著者は述べている。一九三一年の『明治大正史世相篇』は現実の社会の深刻な課題に対して、その問題の要因を明らかにして解決策を考えようとした意欲的な書物として評価する。

一九三〇年代に柳田が提示した「何故に農民は貧なりや」という課題や文脈はマルクス主義からの転向者の抱いていた目的観と一致するものである。福田は、大間知篤三、守随一、佐々木彦一郎、比嘉春潮、関敬吾、橋浦泰雄などを転向者として挙げている。

一方、民俗学方法論は『民間伝承論』（一九三四年）での重出立証

法と、『郷土生活の研究法』（一九三五年）で民俗学が社会に役に立つ学問であると印象づけた。この時期から、ごく普通の生活を送っている定住農民を示す語として柳田は常民を用い始めるようになった。

一九三四年には柳田が主導とした大規模な山村調査が行われる。この調査は共通の調査項目を準備し、統一的な調査内容で日本全体を調査しようとする計画である。この成果は柳田國男編『山村生活の研究』として一九三七年に刊行された。ひきつづき海村調査も行われた。これは一九三七年から一九三九年までの二年間の調査で、日本列島各地の離島や海岸地帯の村落が調査対象地であった。これらの調査結果は調査項目ごとにまとめられたが、それぞれの村の民俗間の関連性が完全に無視されてしまっている。

一九三五年、東京で日本民俗学講習会が開催された。参加者は全国におよび、講義を聞いて民俗学という新しい学問の存在と研究対象や、それをどのように調査し、整理報告すればよいかを理解した。その後、折口信夫が中心となり民俗学研究の全国的連絡機関設立が提案され、講習会に参加した人々を組織することになった。組織の名称は柳田によって民間伝承の会と名付けられ、会報『民間伝承』が月刊で発行された。筆者はこの背景に、民族学との競合、緊張関係をあげ、柳田とその門弟たちによって計画されたものとする。

一般への講習会は行われていたが、民俗学を開講する大学はなかった。しかし、柳田國男が民俗学とは異なる題目で、実質は民俗学の講義をすることは一九三〇年代にすでに行われた。

一方、洪沢敬三はものゝ物質文化にこだわり、『民具図彙』という図録の編纂を計画した。これが刊行されることはなかったが、民具と

いう用語が登場し、文字資料の重視、漁業・漁村の研究、個別地域での生活の全体像を把握しようとしたことに、柳田との研究姿勢の差違を見出している。アチックミュージアムは一九四二年に日本常民文化研究所と改称した。

当時も民俗学の中心人物はもちろん柳田國男であったが、柳田の民俗学と異なる方向に向かって民俗学を研究する人々もいた。本書では、中山太郎、松村武雄、肥後和男、赤松啓介が紹介されている。彼ら自身も柳田を意識しながら、少なからず柳田の影響を受け、批判的に研究を進めていったことの裏返しでもある。

VIでは戦争と民俗学の関係について述べられる。これまであまり触れられたことのないテーマを学史にとりあげたのは、注目すべき点である。日中戦争が始まると、その影響は民俗学にも及び、『民間伝承』誌上でも民俗学の性格づけに民族が強調されるようになった。日本民族の自己認識の学問ということが言われ、民俗学においても、アジア諸地域を占領支配する日本民族が強調されるようになった。一九四一年七月には『民俗台湾』が創刊される。雑誌に掲載された報告は、基本的に日本語で書かれており、台湾の民俗を台湾の言葉や中国語で記録することはせず、植民地台湾の民俗学という性格が表現されていたと著者は述べる。

VIIでは、戦後の日本の改革において、民俗学が少なからず関わってきたことが述べられている。日本を占領したアメリカは、日本を統治するために民間情報教育局（CIE）など九つの幕領部を設けた。CIEでは日本社会の基礎的な調査が行われ、多くの研究者が動員された。民俗学は組織的に関わることはなかったが、研究者として、柳田

國男の下で活動してきた関係者や、日本常民文化研究所の関係者が参加していた。

一九四七年七月三日には民俗学研究所が設立される。この研究所は所長を置かず、同人の衆議によって運営されることになっていたが、実質は柳田の書齋が研究所であった。柳田が提供した蔵書と資料が研究所の研究備品であり、この体質はその後長く問題を残した。民俗学研究所は財団法人として認可されてはいたが、純粹な民間の研究機関であり、その財政基盤は弱体であった。所員は書籍の編集出版に追われ、日常的な研究活動が疎かになっていく。中心にいた柳田國男自身も、研究所での理論の深化が見られず、文化人類学に対して独自性を主張できない民俗学の状況に対して苛立ちを露わにし、一九五六年一月以降研究会には出席しないと表明した。そのため、柳田によって背後から全面的に支えられていた民俗学研究所は急速に弱体化し、設立から十年で姿を消した。

第二次大戦後、民主化への希求からさまざまな改革が行われた。教育改革ではアメリカから社会科という新しい教科が導入された。この社会科の性格は、民俗学と一致すると柳田は考え、教科書作成にも民俗学研究所が積極的に関わった。

戦後もっとも早く民俗学の世界で活躍した人物として、東京教育大学の史学科教員であった和歌森太郎が紹介されている。和歌森の専門は宗教社会史であり、その歴史記述には民俗学の知見が多く活かされ、民俗学と旧来の歴史研究を統合する方向で、「民俗事象を、それを保持し行っている地域の社会型とか文化度によって位置づけ歴史的展開を考える」という独自の方法を提唱した。

VIIIでは、日本民俗学会と民俗学の、発展と衰退を順を追って述べている。一九四九年に民間伝承の会は日本民俗学会と改称した。戦後の民主化に象徴される新たな動きは、大衆や庶民、人民という言葉で示される多数の人々の歴史や文化を重視することとなり、そのような人々の歴史を追及してきた民俗学が注目され、期待される機会が急増した。他の諸学問と協同・協力する機会が九学会連合として作られ、民俗学は参加諸学会のなかでもっとも熱心に活動したと著者は評価している。

日本民俗学会が新しく始めた事業が年会の開催である（一九四九年九月）。学会として、『民俗学研究』（一九四九年）、『民俗学辞典』（一九五一年）、『年中行事図説』（一九五三年）、『民俗学手帖』（一九五四年）、『日本民俗図録』（一九五五年）、『綜合日本民俗語彙』（一九五五、一九五六年）などの刊行物を出版したことも、他の学問や他学会の在り方と比べて特筆できよう。

そのほか、単行本で個人の研究成果が公刊されることも多くなってきた。本書では宮本常一『ふるさとの生活』、瀬川清子『販女』、和歌森太郎『中世協同体の研究』（一九五〇年）、『歴史と民俗学』（一九五一年）が挙げられている。さらに、民俗学の普及を図る概説書・案内書も刊行されるなど学会の制度化が一挙に進展した。

一九五三年五月に日本民俗学会は新たに機関紙として『日本民俗学』を創刊する。これは季刊として刊行されたが、ページ数も多く、長い論文をもつぱら掲載するようになった。『日本民俗学』によって、一つの論文が独立した研究の完成品として掲載されることが多くなり、民俗学研究の水準を引き上げることになった。その一方で、在

野の人々が気楽に論文を投稿できる機会を奪うことにもなった。「野」の学問がアカデミックな学問に変化していくことをすでに示していたようである。しかし現在も学術雑誌『日本民俗学』が所属を記さないのはその継承でもあろうが、他の学会誌からみれば奇異な慣習でもある。

IXでは大学の教育に民俗学が取り入れられる過程を論じる。民俗学研究所解散時の柳田所蔵の本の多くは成城大学に委託され、柳田の門弟である大藤時彦が教授に就任して、一九五八年四月に成城大学文学部文芸学科文化史コースが開設され、民俗学を専門的に研究指導する最初の私立大学となった。国立大学では民俗学に関わる研究者を専任教員として擁していたのは東京教育大学であった。和歌森太郎が東京教育大学の専任教員になり、民俗学会での存在感は大きなものとなっていた。

一九五八年四月、『日本民俗学大系』の刊行が始まる。全一三巻という大規模な講座で、世界でも類を見ない体系的な講座であったと福田は評価する。ただ、『日本民俗学大系』の執筆者の構成は、柳田から独立して民俗学を学ぶ方法を作り出そうとした試みでもあった。

柳田國男は一九六二年八月八日に八八歳で死去した。柳田の死によって日本各地の民俗学研究者は励みになる目標を失い、「野」の学問としての民俗学が明確にアカデミック民俗学となった画期として大きく取り上げられている。

本書は、日本民俗学会の中心で活躍した著者によるバランスのとれた学史の展望である。福田が柳田國男や折口信夫という民俗学のカリスマからは、ある程度客観的な立場にいたという経歴がそれを可能に

したともいえる。それでも本書には柳田國男の名前が頻繁に登場する。索引で見ると柳田が出ているのは本文三〇六頁のうち、じつに一五六頁におよぶ。またそのうちの一一五頁が、IV章からVII章に含まれる。

日本民俗学会が設立される以前の民俗学に対して柳田國男の位置づけは特別なものがあった。その後の民俗学史については、これから筆者は続編を考えているという。ただ、柳田の死後、アカデミック民俗学はどこが担っていくのかについては、まだ研究者に生存者が多いだけに、学史をどう記述するか議論が分かれることも予想される。

本書は一般書ではないため、私のような初学者には理解の難しい箇所もあった。著者によって著された『日本民俗学の開拓者たち』（二〇〇九年、山川出版社）と併せて読むと理解しやすい。索引は事項、人名、書名・誌名索引の三種が二二ページにわたって巻末にあり、かつ年表も充実している。ただ近世の年表がないのは惜しまれる。

評者はこれから民俗学と地理学の接点の領域を学んでいきたいと考えているまったくの入門者である。こういう初学者がこの新刊書を紹介することは筆者に失礼にあたるかもしれないが、民俗学の流れを相対化する格好の良書であったことは確かである。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程）